百人一首を覚えよう！ その5 (41～50)

41. 恋すてふ 我が名はまだき 立ちにけり 人知れずこそ 思ひそめしか
(こひすてふ わがなはまだき たちにけり ひとしれずこそ おもひそめしか)

(壬生忠見 (みぶのただみ) = 壬生忠岑 (No.30) の子 「拾遺集」)

42. 契りきな かたみに袖を しぼりつつ 末の松山 波越さじとは
(ちぎりきな かなみにそでを しぼりつつ すゑのまつやま なみこさじとは)

(清原元輔 (きよはらのもとすけ) (908～990) 「後拾遺集」)

43. 逢ひ見ての 後の心に くらぶれば 昔は物を 思はざりけり
(あひみての のちのこころに くらぶれば むかしはものを おもはざりけり)

(権中納言敦忠 (ごんちゅうなごんあつただ) (906～943) 「拾遺集」)

44. 逢ふことの 絶えてしなくは なかなかに 人をも身をも 恨みざらまし
(あふことの たえてしなくは なかなかに ひとをもみをも うらみざらまし)

(中納言朝忠 (ちゅうなごんあさただ) (910～966) 太っていた。「拾遺集」)

45. あはれとも 言ふべき人は 思ほえて 身のいたづらに なりぬべきかな
(あはれとも いふべきひとは おもほえて みのいたづらに なりぬべきかな)

(謙徳公 (けんとくこう) (924～972) 「拾遺集」)

46. 由良の門を 渡る舟人 梶を絶え 行方も知らぬ 恋の道かな
(ゆらのとを わたるふなびと かぢをたえ ゆくへもしらぬ こひのみちかな)

(曾禰好忠 (そねのよしただ) 丹後 (北京都) の人) 「新古今集」)

47. 八重葎 しげれる宿の さびしきに 人こそ見えね 秋は来にけり
(やえむぐら しげれるやどの さびしきに ひとこそみえね あきはきにけり)

(恵慶法師 (えぎょうほうし) 播磨国 (兵庫) の国分寺の僧) 「拾遺集」)

48. 風をいたみ 岩打つ波の おのれのみ くだけて物を 思ふころかな
(かぜをいたみ いわうつなみの おのれのみ くだけてものを おもふころかな)

(源重之 (みなもとのしげゆき) 旅好き) 「詞花集」)

49. 御垣守 衛士のたく火の 夜は燃え 昼は消えつつ 物をこそ思へ
(みかきもり ゑじのたくひの よるはもえ ひるはきえつつ ものをこそおもへ)

(大中臣能宣朝臣 (おおなかとみのよしのぶあそん) (921～991) 「詞花集」)

50. 君がため 惜しからざりし 命さへ 長くもがなと 思ひけるかな
(きみがため をしからざりし いのちさへ ながくもがなと おもひけるかな)

(藤原義孝 (ふじわらのよしたか) (954～974) 「後拾遺集」)